

シュガーロードで花開く小城の魅力

日本遺産に認定された
「砂糖文化を広めた長崎街道～シュガーロード～」



小城とシュガーロード

昨年6月、「砂糖文化を広めた長崎街道
「シュガーロード」」をつなぐストーリー
が、日本遺産に認定され、新たな活性化
の起爆剤となることが期待されています。

「長崎街道」とは、江戸時代の鎖国中に、海外と唯一の窓口であった出島から長崎、佐賀を通って小倉を結んだ街道のことです。その道を通り、海外からの品々や技術、文化、そして砂糖が京・大坂、江戸などへと運ばれました。

街道沿いでは砂糖のほか、菓子作りの技法なども入手しやすかったため、全国にも有名な銘菓が誕生。

さらに砂糖をふんだんに使う南蛮菓子
の伝来により、菓子の世界に革命が起こ
り、各地の文化と風土を取り入れた個性
ある砂糖文化が開花していきました。

そのため長崎街道は砂糖の道「シュガーロード」とも呼ばれ、今なおその技術と味が受け継がれています。

砂糖の伝来がもたらした数々の銘菓とともに多くの文化財が息づく「シュガーロード」。小城市にもその歴史がしっかりと受け継がれています。

※「日本遺産 (Japan Heritage)」とは、地域の歴史的な魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として文化庁が認定するもの。

小城羊羹

小城羊羹が発展するきっかけは、明治8(1875)年(明治5年説もある)に森永惣吉が羊羹屋を創業したことからはじまりました。

特に明治27(1894)年に起こった日清戦争、明治37(1904)年の日露戦争では、貯蔵できて日持ちがよいという羊羹の特性が軍隊に受け入れられて需要が高まり、飛躍的に「小城羊羹」の名が全国に広がりました。



第2次世界大戦後、「小城羊羹」は観光の土産品や茶菓子として好まれました。現在でも市内では、18店舗(県内22店舗)で羊羹が作られています。

旧砂糖貯蔵庫及び製造道具等

(村岡総本舗羊羹資料館及び展示資料)

村岡総本舗本店

羊羹資料館の前身である砂糖蔵は、携行食、保存食として羊羹需要の高まりに合わせ、昭和16(1941)年に建てられました。当時は1階が砂糖蔵、2階が資材倉庫で、れんが造りの高床式の構造は、防火・防湿に工夫されていました。昭和59(1984)年に改装され、現在は1階が試食のできる休憩室、2階が展示室となり小城羊羹の歴史や製造法が紹介されています。

また、昭和36(1961)年に建設された本店は当時としては珍しい有田焼の磁器のタイルが使用されています。



▲(右)旧砂糖貯蔵庫
(村岡総本舗羊羹資料館)
(左)村岡総本舗本店

牛津宿

牛津川沿いに形成された「牛津宿」は、長崎街道や有明海の干満の差を利用して川をさかのぼる船によって、長崎・出島からいろいろな輸入物資が運ばれ、それを取り扱う商人・卸問屋の宿泊地として賑わっていました。商家の記録には、商人や旅人、江戸幕府の要人や武士たちが牛津宿を通ったと記されています。また、宿の中

ほどこには大名などが休憩、宿泊する上使屋や町屋が立ち並んでいました。現在、牛津駅前の陶板には、当時の活気ある宿場町の様子をイメージさせる絵画が描かれています。



▲ JR牛津駅前の陶板

日本の宝に 磨きをかける

小城羊羹協同組合 理事長
村岡 安廣さん



長崎街道を起源としたシュガーロードを軸に、小城にも砂糖文化が広がりました。

江戸時代には日本に伝わっていた羊羹文化。小京都ともいわれ、禅や茶道が発達していた小城には羊羹文化を受け入れる下地がありました。綺麗な水が豊富だったことも羊羹作りに適していたようです。

「小城羊羹」は明治から昭和にかけて全国的に有名になりました。戦争の時代においても、砂糖が小城駅

から羊羹店へ馬車で運ばれ、新たなシュガーロードが誕生したとも言えます。

昔は作れば売れる時代で技術を受け継ぐ人が一番でした。しかし、現在は伝統や文化がその地域に残るか

どうかは食べる人にかかっています。

今回、日本遺産の認定を受けましたが、食べる人が地域の宝としてどう盛り上げるかが重要です。

これまで5回にわたって開催してきた「日本一！ようかん祭り」も、多くの方に羊羹を食べていただきたいという思いから開催しています。独自の美味しい食べ方を見つけ、周りの方に自慢していただきたいのです。

シュガーロードという地域の財産を輝かせ、道を広く大きくするのはここに住む私たちです。

小城市に息づく歴史と伝統と文化を自分たちの宝、日本の宝として大事にし、広めていきたいと思います。

問 商工観光課(東館1階) 【担当】樋渡・江頭

☎ 37・6129